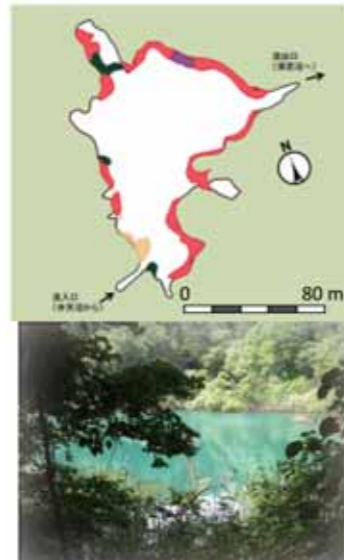
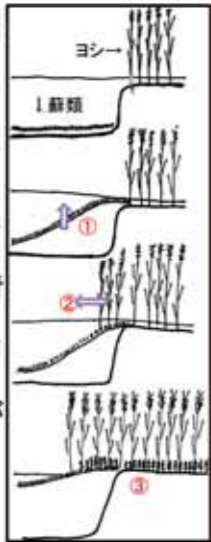


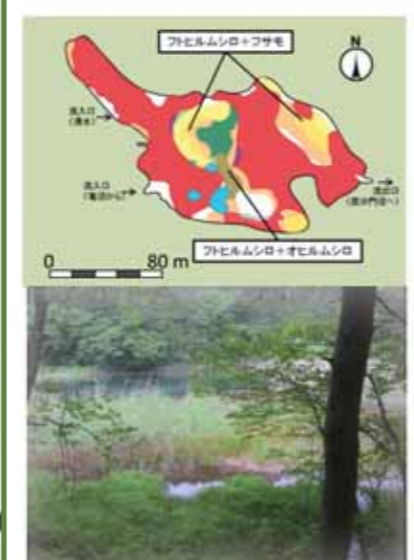
湿性遷移と五色沼

五色沼湖沼群では、湖岸や湖底に見られる藓類が長い時間をかけて発達しマットが陸を作り(①)、陸化した場所にヨシが侵入することで(②)、湿地となっていく(③)という変化が起きていると言われている。陸化は青沼や瑠璃沼で顕著であり、一方竜沼ではヤナギ類などの樹木が湖岸を覆っているために藓類が十分に光合成を行って生長することができず、陸化が進んでいない。



竜沼

弁天沼の下流、深泥沼の上流に位置する。湖沼が自然探勝路から離れているため、樹木が葉を広げている春～秋にかけては視界が遮られ自然探勝路からの観察が難しい。pHは中性付近の6～7程度。
水生植物はヨシ、ガマ、フトヒルムシロの3種が生育している。この湖沼ではヨシの繁茂が少ない。これは湖面まで張り出しているヤナギ類などの樹木が湖岸を覆い、藓類の生育を阻んでいるために陸化が進んでいないためであると考られている。
写真は夏の竜沼。樹木が湖岸まで張り出している。



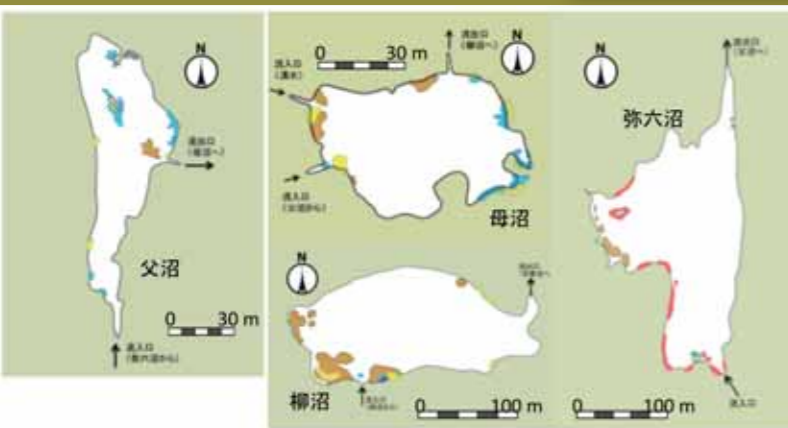
深泥沼

竜沼の下流、毘沙門沼の上流に位置する。場所によって異なった水質を持つ湖沼である。pHは表面付近でほぼ中性の6～7程度。水生植物の種数は多く、8種が生育している。湖面はそのほとんどがフトヒルムシロかオヒルムシロの浮葉によって覆われ、開放水面はわずかである。浮葉の下にはフサモが生育する。
抽水植物はヨシが湖沼の半分以上を覆っているが、狭い範囲でガマやミクリなども生育している。
過去から現在にかけて開放水面が減少し、ヨシが分布を拡大しているようである。ヨシ群落のヘリには局所的にヒメタヌキモが生育している。
写真は夏の深泥沼。



赤沼

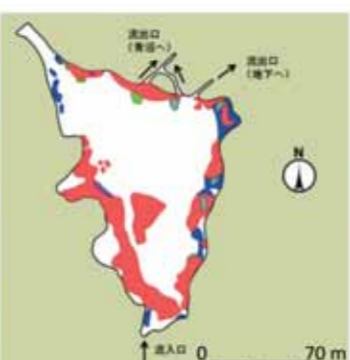
流入口を持たない独立水系の湖沼である。赤沼から流出した水は深泥沼の下流に位置するヨシ湿地に接続しそのまま毘沙門沼に注ぐ。鉄分の含有量が多いなど他の湖沼とは水質が大きく異なる。pHは酸性で4程度。
湖岸はそのほとんどをヨシが覆う。しかし水生植物の種数は少なく、見られるのはヨシとコウキクサの2種のみである。写真は秋の赤沼



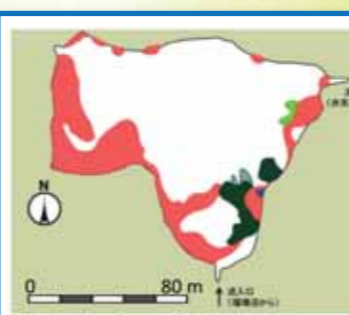
弥六沼、父沼、母沼、柳沼
他の湖沼とは表流水の形では接続していない。pHはほぼ中性の6～7程度。ヨシの繁茂はほとんど見られない。比較的人為的な影響が大きい湖沼群であり、水質の悪化が見られる。かつては豊かな水生植物相が見られたものの、多くが姿を消し現在は侵略的外来種であるキシウブやコカナダモが侵入している。

五色沼湖沼群水生植物探検マップ

※矢印は表流水の流動を、茶色の太線は自然探勝路を示す。

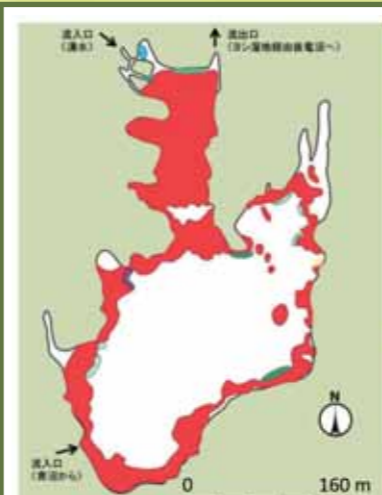


瑠璃沼
五色沼湖沼群の中では一番上流にあたる。青沼と同じく藓類マットの発達が著しく、陸化遷移によるヨシの分布拡大が起っているようである。pHは酸性で4～5程度。
水生植物はヨシ、ガマ、イヌタヌキモが生育している。イヌタヌキモは五色沼湖沼群ではこの湖にのみ生育している。



青沼

瑠璃沼の下流、弁天沼の上流に位置する。pHは酸性で4～6程度。瑠璃沼と同じく藓類マットの発達が著しく、西岸などで陸化に伴ってヨシの分布が拡大しているようである。
北岸ではヨシがほとんど見られないが、これは樹木が張り出しているために竜沼と同じような理由で陸化が阻まれているためであると考えられる。
生育している水生植物はヨシのみであり、沈水植物や浮葉植物などは一切見られない。



弁天沼

青沼の下流、竜沼の上流に位置する。五色沼湖沼群の中では毘沙門沼に次いで広い湖沼である。pHは酸性で4～5程度。湖岸はほぼヨシに覆われる。
生育する水生植物の種数も多く、オヒルムシロ、フサモ、ヒメタヌキモなどが重複しているため深泥沼によく似た印象を受けるが、深泥沼のように湖面が浮葉で覆われることはない。かつてはフトヒルムシロが多く確認できたと報告があるが、現在は見られない。

- 水生植物分布図・凡例
- キシウブ
 - ヨシ
 - ガマ
 - ミクリ
 - ナガエミクリ
 - スイレン(植栽)
 - オヒルムシロ
 - フトヒルムシロ
 - フサモ
 - イヌタヌキモ
 - ヒメタヌキモ
 - コカナダモ
 - イヌコリヤナギ
 - シロヤナギ
 - オノエヤナギ
 - ミズゴケ類